

【研究論文】 語りから紐解く方言意識の形成と変容

—SCAT を用いた方言話者個人レベルの質的研究—

佐藤 孝一

日本大学大学院総合社会情報研究科前期課程修了

Revealing the Formation and Transformation of Dialect Awareness through Narratives

— A Dialect Speaker Individual-Level Qualitative Analysis Using SCAT—

SATO Koichi

M.A., Graduate School of Social and Cultural Studies, Nihon University

This study examines how speakers' awareness of their own dialect changes over their lifetimes through qualitative analysis. Since the Meiji era, dialects in Japan have been stigmatized and targeted for eradication, however, today they are often regarded positively, framed as a form of "entertainment". While shifts in societal attitudes are well documented, less is known about changes in individual perceptions. To address this gap, interviews were conducted with two residents of northwestern Kyushu—a man in his 50s and a woman in her 70s—and analyzed using the SCAT (Steps for Coding and Theorization) method. The findings show that attitudes toward dialect, its use, and code-switching with standard Japanese changed with age. These shifts were triggered by personal factors, such as expanding social relationships and societal factors, such as media influence. Importantly, the trajectories of change differed between the two individuals, reflecting environmental variables such as family influence and relocation. By focusing on the individual level, this study reveals nuanced aspects of dialect awareness among native speakers that large-scale surveys fail to capture.

1. はじめに

明治時代以降、日本社会における方言は、「撲滅」「記述」「娯楽」という3類型をもって変遷した（井上, 2000）。明治時代から第2次世界大戦が終結するまでは「撲滅」の対象になっており、その流れから、戦後になっても、方言の使用は恥ずかしい、方言は汚いなど否定的に捉えられていた。昭和30年代に地方から集団就職で上京した若者は方言に対してコンプレックス持ち、訛りが出ないようにしていた（陣内, 2007）。

しかし、最近では井上（2000）が示した3類型の中の「娯楽」として方言が使用され、方言で親近感を醸し出す演出や、観光地を訪れる人に対しては非

日常感を演出できるとして観光資源にもなっている。加えて、公共空間、私的空間を問わず不特定多数の目に留まるメッセージ等に方言を使うことによって、伝えたい内容を強調できることから、注意喚起や非常事態が生じた地域への応援や励ましに活用されている（井上他, 2013；佐藤, 2022）。このようなことから現代の日本社会では方言使用が肯定的に捉えられていることが分かる。このように日本社会全体では方言に対する意識や方言使用の捉えられ方が否定的なものから肯定的なものに変化してきたと言うことができるが、方言話者個人は方言や方言の使用についてどのように捉え、そして、その捉え方は変化をするのか、本研究ではそれらに焦点を当て、方言

話者個人のライフステージの変化とともに方言意識がどのように形成され、変容していくのかそのプロセスについて明らかにする。

2. 先行研究

方言に対する意識および方言使用の意識に関して、これまでに行われた調査・研究を概観し、調査内容を整理して、課題の所在について検討する。

2.1 方言意識の変容とその限界—社会から個人へ

方言に対するイメージや言語意識を捉えるための調査が 1994 年から 1995 年にかけて若年層から高年層を対象に 14 都市¹で行われた(言語編集部, 1995)。この調査では、共通語が影響を与えていると言われる方言の変容について、方言話者の言語意識がどのように関与しているのかを世代別・地域別に示している。

方言意識の調査では、生育地の方言または居住地の方言について「好き」か「嫌い」か、さらに、予備調査をもとにした方言イメージ項目、例えば、「荒っぽい」「汚い」などのネガティブなイメージ、「丁寧」「親しみやすい」などのポジティブなイメージを項目として選定して、どのようなイメージを持っているのかを尋ねている。また、共通語に対する意識、使用場面における方言と共通語の使い分けに関しても質問項目として挙げている。

日本全国規模で行われた方言意識の調査として、田中(2017)が行った Web アンケートを用いた全国に居住する 2 万人を対象にした方言意識調査が挙げられる。この調査では方言・共通語意識の動向を地域別・年代別で報告、分析を行っており、生育地方言に対する好悪、方言の使用頻度や共通語との使い分けに関して質問を行い、地域別・年代別に結果をまとめている。また、このアンケートでは、方言に対するイメージだけでなく、話し相手の属性によって方言の使用有無の違いがあるのかについても調査している。この調査では、方言を積極的に使用し、方言に愛着を持っている割合が西日本地方で高いことが示され、特に九州地方はどの年代においてもそれらの傾向が高いとしている。

地域を限定して行われた方言意識調査では、大橋

(2023) が秋田方言に対する意識や方言使用の意識の世代差について調査している。この中で、各年代層ともに価値観を共有しているものの、高年層の方が方言使用に恥ずかしさを持っていたり、外向けに発信する方言に抵抗を感じたりしているとしている。

秋山(2019)では茨城方言に対する意識の世代差について調査が行われた。この中で、10 代から 50 代まで年代が上がるにつれて茨城方言に対する好ましさや将来に残したいという意識の割合は上がるものの、60 代以上の回答ではその割合は下がるとしている。また、秋田方言と同じように茨城方言でも、方言に対する恥ずかしさは高年層が抱いているという傾向が示されている。

近藤(2010)は愛知県豊明市の方言をについて中学生を対象とした使用意識の調査を行った。この調査からは、方言を好ましく思っている割合が高く、特に女子の方が男子よりも方言に対して好意的であることが分かった。

下地(2019)では沖縄方言を取り上げ、高校生から 20 代を対象とした方言使用意識について調査が行われた。この研究では、まず沖縄地方の方言を、伝統的な沖縄方言と方言の新語であるウチナーヤマトグチの 2 種類に分類している。そして、伝統的な沖縄方言は、高校生世代では外国語と同じように捉えられており、ウチナーヤマトグチも含めて、「イメージが悪い」から意識的に使用しない傾向があることを示している。

これらの研究は、地域社会や世代といったマクロな集団を分析の主眼としており、個々の話者の中でどのように意識しているのか、また解釈されているのか、その多様性について焦点が当てられているとは言えない。また、共時的な視点で方言意識を捉えているため、時代の流れの中でどのように方言意識が変容したのかという通時的な方言意識の変容や形成を細かく捉えているわけではない。

2.2 問題の所在—ミクロな視点の導入

言語編集部(1995)や田中(2017)のような大規模調査等の定量的なアプローチは方言意識に関して社会全体、あるいは地域全体、そして世代差といった社会や集団全体の傾向を把握するうえで有効である。

しかし、その数値の背後にある方言話者個人が持つ複雑な感情や意識、またその移り変わりを十分に捉えきれているとは言い難い。

方言話者個人の方言に対する意識や使用意識の形成には、幼少期の家庭環境から始まり、進学や就職といったライフイベント、そして新たな対人関係の構築といった、その個人が歩んできた固有の人生の軌跡に深く位置づけられていると考える。Wirtz & Pickl (2025) では、オーストリア在住のドイツ語話者 701 名を対象にアンケート調査を行い、成人期を通じての個人レベルの言語に対する意識の変化について、さまざまな主要なライフイベントが及ぼす影響について分析している。ここで取り上げられたライフイベントとは、大学進学、就職、退職が主である。結果として、方言へのアイデンティティといった感情・態度的要因が、ライフイベントに関連する変化をより容易に受容する傾向にあるとしている。そして、一個人の生涯にわたる言語意識の変化は、個人の経験的要因によって影響を受ける現象として捉えている。

幼少期の家庭環境、特に親が持つ言語意識が子供に影響を及ぼすことについては、バイリンガルや移民家族などで親が持つ言語への価値観や言語選択の方針が子供に影響を与えており、親の言語教育の方針が子供の言語リテラシーに影響を与えているといえることができる (De Houwer, 1999 ; 宮崎, 2014)。

方言に限っても、アイデンティティとしての方言の受容や伝統的な文法・アクセントの基盤については幼少期に家庭内で親が示した言語態度やインプットに依存している (高木, 2006 ; 竹村, 2010)。

このようなことから、幼少期の家庭環境や幼少期から成人期にかけてのライフイベントが個人の方言を含む言語に対する意識の形成・変容に影響を与えると考える。つまり、方言に対する意識が個人の内面においていかに多様に経験され、意味づけられているかという変容のプロセスを捉えるためには、方言話者自身が辿ってきた人生についての語りに真摯に耳を傾け、自らの人生をどう意味づけているのかその人生の文脈に即して、方言意識の生成メカニズムを解釈していくアプローチによる視座が不可欠となる。

3. 研究課題

先行研究では、共時的かつマクロ的な視座で地域別・年代別に方言意識の違いについて捉えているが、方言意識の形成と変容は方言話者個人のライフステージの移行とともに起こることも示唆されている。そこで、方言話者個人のライフステージの移行とともに起こる方言意識の形成と変容について、次の 3 点からそのプロセスとメカニズムを明らかにする。

- 方言に対する感情やイメージの形成と変容
- 生活環境の変化に伴う方言使用の意識の変容
- 対人関係や社会的場面における言語行動の戦略

これらの課題について、次節では調査・分析の方法について述べる。

4. 調査・分析の方法

4.1 調査方法

本研究では、田中 (2017) で方言使用の意識と共通語との使い分け意識が高かった九州地方の方言母語話者を対象に半構造化インタビューを行った。インタビューでは次の 4 点の質問を軸に進めた。

1. 方言に対する「好き」「嫌い」などの感情やイメージはどのような変化があったのか。
2. 自身および他者の方言使用に対し、その意識にはどのような変化があったのか。
3. 話し言葉だけでなく看板やポスター等に文字で表記される方言使用に対し、その意識にはどのような変化があったのか。
4. 方言と共通語の使い分けに対し、その意識はどのような変化があったのか。

これら 4 点を軸に質問して、協力者に人生を振り返ってもらい年代ごとに方言意識について語ってもらった。

このインタビュー調査は 2024 年 10 月 19 日と 2024 年 11 月 3 日に行った。インタビュー協力者は 2 名である。調査への参加は任意であることを伝え、参加承諾の上、同意書に署名を得た。インタビュー内容

表 1 インタビュー調査協力者の属性

回答者	年齢	性別	生育地	(職業) 居住地							
				0	10	20	30	40	50	60	70 (歳代)
A	50 代	男性	長崎県 佐世保市	長崎県 佐世保市 京都市内 (営業) 東京 23 区内 (FP) 佐賀県 武雄市							
B	70 代	女性	長崎県 佐世保市	(無職) 長崎県佐世保市							

は録音して、その録音データを文字化した。

協力者である方言話者 A (以下、「A」) は、50 代男性で中年層にあたる。生育地は長崎県佐世保市である。高校卒業後、京都市内の大学へ進学し、大学

卒業後は東京 23 区内で就職して 30 代半ばまで営業職として働いていた。その後佐賀県武雄市に移住し、ファイナンシャルプランナー (以下、「FP」) として独立して現在に至る。方言話者 B (以下、「B」) は、70 代女性で高年層にあたる。生育地は A と同じく長崎県佐世保市である。現在に至るまで定職に就いたことはなく、また居住地の移動の経験もなく長崎県佐世保市に居住している。この 2 人を調査対象に選択したのは、この 2 人の人生にある大きく異なる点に着目したからである。それは、居住地の移動の有無、仕事に従事した経験の有無、異なる年代である。

このような異なる人生の軌跡を辿ることによって、方言話者個人の方言意識の形成と変容の違いが鮮明に浮き彫りになると考えた。A、B 両者ともに生育地方言、居住地方言は東條操が提唱した方言区画論による肥筑方言区画内である。表 1 にインタビュー調査の協力者 2 名の属性をまとめた。

4.2 分析の方法

本研究の分析には、SCAT (Steps for Coding and Theorization) を用いた (大谷, 2008)。SCAT は簡便かつ理論的な質的分析の手法であり、量的研究手法による「データの厚み」よりも「構成概念の抽出と理論化」に重点を置いた分析が可能である。また、少数のインタビューや短いテキストデータからも意味のある理論的記述を行うことができるという特長を持つ。本研究は、方言話者個人の人生を振り返って、方言に対する意識や共通語との使い分けの意識などの方言意識の変容に迫ることが目的である。この目的を達成するためには、個々の語りから、方言意識が形成され変容していく過程を詳細に分析する必要がある。さらに、インタビュー対象者が 2 名と少数である。これらの点を鑑みて、SCAT のアプローチが適していると判断した。

SCAT は逐語録などのテキストデータに対して次の 4 つのステップを段階的に踏みながら分析を進める方法である。

- (1) データ中の着目すべき語句を抽出
- (2) (1) で抽出した語句を言いかえるデータ外の語句を列挙

表2 SCATによるAの分析（一部抜粋）

発話者	テキスト	〈1〉データ中の着目すべき語句	〈2〉語句の言い換え	〈3〉〈2〉を説明する概念	〈4〉テーマ・構成概念	〈5〉疑問・課題
聞き手	東京で仕事をしておられた期間がありますけども、ここでも方言を使うことに関してはどうでしたか。	東京で仕事、方言／使うこと	生育地以外での方言使用について	言語使用の変化に対する関心	居住地による方言使用の操作	
A	僕、もう一切。	もう一切	方言を使っていない	方言の抑制	東京では共通語志向	
聞き手	一切使っていない？					
A	僕よく言われたのが方言出ませんねってよく言われたんですよ。あえて使ってなかったというか。何だろう、そういうところはあえてそういう地元感出さないようにしてたわけじゃないんですけど、はい、一切使わなかったですね。	方言出ませんねって言われた／あえて使ってなかった／地元感出さないようにしてたわけじゃない	他者からの評価／意識的な方言回避／曖昧な理由	相手にも分かるような共通語によるコミュニケーション	方言排除と言語適応	方言を使わないようにしていた明確な理由は何か

〈3〉 〈2〉のデータ外の語句を説明するための概念を導入

〈4〉 〈1〉から〈3〉のプロセスで浮き上がるテーマ・構成概念を抽出

なお、5つ目のステップとして疑問・課題の書き出しがあるが、コーディングとされている〈1〉から〈4〉までのステップと異なり5つ目のステップはコーディングとはみなされておらず、必ず行わなければならないステップではない。また、聞き手のテキストの分析が必要な場合がある。

〈1〉から〈4〉までの手順を大谷（2008）で示されたSCAT分析用のフォームを活用し、〈4〉で抽出したテーマ・構成概念に基づいてストーリーラインを記述し、最終的にテーマの関係性を整理しながら理論的な記述へと導かれる点がSCATの分析の核心である。表2は本研究におけるAの分析の一部を抜粋したものである。このようにSCATは、データの逐語的な解釈から理論構築に至るまでのプロセスが明示的かつ追跡可能であるため、質的研究における信

頼性と妥当性を担保する上でも有効であると考えられる。

本研究では上記〈1〉から〈4〉の分析手続きによるストーリーラインの作成と理論記述を行い、「方言に対する感情やイメージの形成と変容」「生活環境の変化に伴う方言使用の意識の変容」「対人関係や社会的場面における言語行動の戦略」の3点について分析する。

5. 分析結果

前章で示したSCATによる質的データ分析の手順に基づき、方言話者AとBのインタビューデータの分析結果を提示する。分析結果の整理からグループ化をしたところ、①「荒い」という印象の多面性、②生活環境の変化と方言使用の戦略性、③方言テリトリー意識の形成要因、の3つのグループを生成した。なお、【】内はSCATにおけるステップ〈4〉で生成されたテーマ・構成概念を示し、A、Bそれぞれの語りは斜字で示した。

5.1 「荒い」という印象の多面性

方言に対するイメージについては、A、B 両者ともに母方言は「荒い」という言葉を使っている。一方で、A と B の内面で「荒い」というイメージが形成された経緯は異なっている。

A は自身が使う方言と共通語の印象について次のように語っている。

やっぱり九州弁²⁾はね、どちらかというと、あんまり下品っていう言い方はよくないかもしれないですけど、ちょっと荒っぽいところとかあるかなと思うので、(中略)スマートな感じする方、標準語と、ちょっと荒っぽい感じする九州弁っていう感じを受けますね。

A が生育地方言に「荒い」という印象を持ったのは、【大学卒業後に東京で働くようになった】のがきっかけだった。この時に A は【生育地方言と共通語の違いを体験】している。そして【初めて生で共通語を聞いて】、【共通語はスマート】だが【生育地方言は荒い】と捉えるようになった。A は語りの中で、生育地方言と同じように、大学生時代を暮らした近畿地方の方言にも「荒い」という印象を持っていることも示したが、これも【共通語はスマート】であるという印象の対比から生じている。このように A が生育地方言や近畿方言に「荒い」という印象を持ったのは、成人してから体験した共通語との対比によって形成されたものと言える。

しかし、A は【生育地方言は荒い】という【ネガティブな印象】だけを持っているわけではない。その荒い生育地方言に【自身のアイデンティティ】も見出している。それは A の次の語りから分かる。

(生育地方言が使われている看板の写真を見て)、僕は多分東京とかで仕事してて、これ見たら懐かしいなって思うと思うんですよ。だからすごくいいかなと思います。

【懐かしい】という表現から、共通語と比較すると【生育地方言はネガティブな印象】をもたらすものの、A【自身のアイデンティティ】として結びつけ

られていると言える。

一方、生育地からの居住移動経験がない B は A とは異なる様相を見せている。B が【生育地方言は荒い】という印象を持つようになったのは、B の母親の影響である。そのことについては次のように語っている。

例えば母が言ったのは、佐世保弁では「先生が来らした」、「行かした」。でも佐賀弁は先生が「来んしゃった」、「来んさった」。そこから辺が違うので、佐世保弁もその来らしたとか行かしたとか聞いたときに、母は何か荒いなと思ったって。あんまり上品じゃないっていうか、丁寧ではないと思ったって聞きました、子供の頃。

B の母親は佐賀地方出身で、【佐賀方言は丁寧】だが B の生育地である【佐世保方言は荒い】という印象を持っており、そのことを B の母親は B が幼少期から口外しており、この時期に【生育地方言は荒い】と刷り込まれたと B は考えている。

B に刷り込まれた【生育地方言は荒い】という印象は、B が成人してさらに強固なものになる。関東在住の親戚に会った時に【関東在住の親戚の言葉遣いが柔らかい】という印象を持ち、さらに、次の B の語りからも【生育地方言は荒い】という印象が強固になっていったことが分かる。

東京から来た人が、佐世保弁で佐世保の方が話してるのを聞いて、喧嘩してるのかと思ったっていうのを聞いたときに、そんな聞こえるんだって思いました。

このように「喧嘩しているようだ」と言われたことが、子供のころに母親から継承した【生育地方言は荒い】という印象を成人しても継続して持つことにつながっている。

以上の比較から明らかなように、【生育地方言は荒い】というイメージは A、B ともに共通しているが、A、B がたどってきた人生において異なる過程によって形成されている。このように、方言に対する

感情は、社会全体が持つ価値観よりも、むしろ各々の人生の異なる過程において形成されると言える。

5.2 生活環境の変化と方言使用の戦略性

方言意識は、進学や就職に伴う地理的な移動を経験することで影響を受け、実際の言語使用において変化が生じる。両者の語りを比較すると、地元に住し続ける B が方言を【無意識の自然な発話】として捉えているのに対し、複数の地域を移動してきた A は、自身の言語を客観視し、新たな【人間関係を構築するための高度な適応戦略】として【方言と共通語の使い分け】をするという対比が浮かび上がる。

京都市や東京 23 区内への移住を経て、佐賀県武雄市でビジネスを行う A 氏の語りから、他地域への適応に向けた自覚的な言語行動が分かる。

まず、A が大学進学のために京都市に居住した時の語りからは、近畿地方の方言を使おうという意志があったことが分かる。

だから関西弁で、よくね、バカにされたんですけど、エセ関西人ってね。(中略)九州弁は一切使わなかったですね。関西いると関西弁を喋っちゃう。

また、東京で働いていた時期についても、

僕よく言われたのが方言出ませんねってよく言われたんですよね。あえて使ってなかったというか。何だろう、そういうところはあえてそういう地元感出さないようにしてたわけじゃないんですけど、はい、一切使わなかったですね。

この語りからは、【居住地による方言使用の操作】を行い、【東京では共通語志向】を持っていたことが分かる。これは A が【方言を排除して言語適応】をしようという意図があったと言える。そして、次の示した語りから故郷に帰れば、故郷の方言を使っていることが分かる。

ただ帰ってきたらね、話しますからね。「何

しよう」とって話すから、そのときにその場所にに応じて変えていく感じなので。

さらに、【場面に応じた方言使用にも意図】があるとしている。特に共通語が使われやすいビジネスの場面での方言使用について次のように語っている。

佐賀で仕事をするようになって、あの……、営業とかするとお客様のところでお話するときにあえて方言を使うときもあるんですよね。それは年配の方とかとお話するときに、ある程度関係性を持った方だけだと思うんですけど、方言で話した方がスムーズに会話は進むというときがあったので、それ、なんかあえて使い分けてたかなと思います。

この語りから【意図的なコードスイッチング】を行い、方言を【心理的距離の短縮ツール】として使用していると解釈できる。A にとって方言は、単なる【自身のアイデンティティ】だけではなく、【相手との関係性】を鑑み、【社会に適応するための戦略的な資源】として機能している。

その一方で、居住地の移動がない B の方言使用については A の戦略性とは全く異なる次元にある。B は自身の共通語と方言の使い分けについて次のように語っている。

自分が方言使ってるのは普通なんですよ、やっぱり。自分でもうネイティブな方言使ってるから、意識なんもしないで話してるけど、話してるけんねって、使うけんねっていう。そういうのは全然意識してないで出てくるから。

この語りからは、【生育地方言の無意識的な表出】や【「意識的な使い分け」という表現への違和感】という概念が見出される。B にとって日常的な方言使用は自然なことであり、A 氏のように環境や相手に合わせて【意図的なコードスイッチング】を行うという発想自体が希薄であることがわかる。

言語行動における戦略性の獲得には、居住地の移動の経験が決定的な役割を果たしていることが明ら

かとなった。居住地の移動を経験した A は、異なる方言との接触を経ることで自らの言葉を相対化・客観視し、【意図的なコードスイッチング】という高度な社会的適応戦略を獲得した。対照的に、居住地移動の経験がない B において言語は環境と一体化しており、適応のツールとして対象化されるには至っていない。

5.3 方言テリトリー意識の形成要因

地域方言とは特定の地域に根差した言語変種であるが、その「地域」を方言母語話者がどの程度の広がりとして認識しているのかは個人間で隔たりが存在する。A、B 両者の語りからその広がりの違いを知ることができる。

京都市や東京 23 区内など複数の地域を移動してきた A 氏の語りでは、自身の出身地を広域的に捉えている。

やっぱり九州弁はね、どちらかというあんまり下品っていう言い方はよくないかもしれないですけど、ちょっと荒っぽいところとかあるかなと思うので……。

A は語り全体を通して「九州弁」あるいは「九州の方言」という言葉を使っており、【外部の視点を通じた広域的な意識】から【「九州」全体を自身の言語テリトリー】として捉えている。A にとっては居住経験のある近畿地方や東京との対比・境界線によって事後的に引かれた【「九州」全体を自身が帰属する方言として再構築】されていると言える。

一方、B は市町村レベルで自身の居住する佐世保市に強いアイデンティティを紐づけているが、幼少期に【母親から受け継いだ方言意識】が原点となり、居住地の移動がないために、その原点となった方言意識が変化しなかった。

まず母親から伝承した方言意識が次のように語られている。

親は両親とも佐賀県出身だったので、佐賀の方言をよく使っていましたから。(中略) 佐世保弁もその「来らした」とか「行かした」とか

聞いたときに、母は何か荒いなと思ったって。あんまり上品じゃないっていうか、丁寧ではないと思ったって聞きました子供の頃。

そして、B 自身の方言意識が次のように語られた。

佐賀弁は、ちょっと丁寧な、上品な感じがしました。佐世保弁はちょっと荒い感じがします。そう思ったんじゃない、小さいときはその上品とか何とかは思わなかったんですけど、やっぱり今振り返ると、今振り返るとですね、佐賀弁は柔らかい感じがしますね。佐世保弁は、長崎とまた違って、荒い感じがします。

このように、B は生育地である佐世保市と隣接する佐賀県の方言は同一ではないと捉えていることが分かる。さらに、B は佐世保市内の地域についても細かく分けて、そう方言の違いについて語っている。

例えば、私も佐世保の真ん中なので、私の住んでたところからすれば、相浦の人の方は、相浦弁ってすぐわかる。佐々の北松の人、北松弁ってわかる。それか佐世保でも早岐の方、早岐弁っていうのもあるからそういうのは違いがわかる。

佐々の北松とは旧北松浦郡のことで佐世保市の北隣りに位置している。また、相浦は佐世保市北部、早岐は佐世保市南部に位置する地域である。B のこの語りからは市町村レベルどころか、市内の南北地域によっても方言が異なると認識していることが分かる。

この発話から見出される概念は、【近隣地域への強い差異化欲求】と【限定的な市町村レベルのアイデンティティ】である。B にとって、生育地である佐世保市は【言語テリトリーは日々の生活圏】であり、A と比べると狭い範囲に限定されている。ここには、A が持つような九州以外の地域での居住経験に基づく比較による方言意識は生じていない。

A と B の語りの比較から、方言話者が認識する方言の使用地域範囲は、生育地や出身地だけでなく、

表3 3つのグループ分類による理論記述

グループ	話し手	理論記述
①	A	【大学卒業後に東京で働くようになった】のを機に、【初めて生で共通語を聞いて】自身の言語環境を比較する。 【生育地方言と共通語の違いを体験】したことで、【共通語はスマート】であるという印象が形成され、その対比から【生育地方言は荒い】という【ネガティブな印象】を成人期に抱くに至る。 【生育地方言は荒い】という単なる否定の対象にとどまらず、【懐かしい】感情と結びつくことで、最終的に【自身のアイデンティティ】として肯定的に受容される。
	B	- 幼少期に佐賀出身の母親から「【佐賀方言は丁寧】だが【佐世保方言は荒い】」と聞かされていた家庭環境が原点となり、早期段階で【生育地方言は荒い】という認識が刷り込まれる。 - 成人後、【関東在住の親戚の言葉遣いが柔らかい】と思った経験や、他県からの来訪者が言う「喧嘩しているのかと思った」という評価に直面する。 - 外的評価が、幼少期に親から受け継いだ「荒い」という初期のイメージを補強し、成人後も【ネガティブな方言意識】として持続される。
②	A	- 京都・東京への移住では、周囲の環境に同化しようとする【居住地による方言使用の操作】を行った。【東京では共通語志向】で【方言を排除して言語適応】しようとした。 - 共通語が前提とされるビジネス場面において、あえて方言を織り交ぜることが【心理的距離の短縮ツール】として機能することを発見し、【意図的なコードスイッチング】を【人間関係を構築するための高度な適応戦略】として能動的に行う。 - 方言は単なる【自身のアイデンティティ】の表出を超えて、【相手との関係性】をコントロールし、【社会に適応するための戦略的な資源】となる。
	B	- 生涯にわたる居住地移動の経験がないので、方言使用は【生育地方言の無意識的な表出】として維持される。 - 他者と同化するためのコードチェンジングの必要性に直面しないため、【「意識的な使い分け」という概念に対して違和感】を抱く。 - 生育地方言は戦略的な道具にされることなく、周囲の環境と一体化した【無意識の自然な発話】として機能し続ける。
③	A	- 京都・東京という複数の異なる方言圏を移動・生活するなかで、【外部の視点を通じた広域的な意識】が培われる。 - 他の主要な方言圏や共通語との境界線を自覚することの対抗作用として、自身の出身地を「九州」というマクロな広がりで括ようになる。 - 市町村レベルを超えて【九州全体を自身が帰属する方言として再構築】し、本人が認識する【九州全体を自身の言語テリトリー】へと拡張される。
	B	- 幼少期に【母親から受け継いだ方言意識】が初期値となり、その後の居住地移動による揺らぎを経験しないため、その境界認知が変容することなく固定化される。 - 他地域方言との対比経験や外部の視点を通じた経験が希薄なため、日常的に接するごく身近な地域の言葉との違いに敏感になり、【近隣地域への強い差異化欲求】が高まった。 - 生育地方言地域内の微細な方言差を識別・強調し、自身の【方言テリトリーは日々の生活圏】という極めて【限定的な地域レベルのアイデンティティ】に固執することになる。

個人の移動経験の有無によっても伸縮することが示された。居住地の移動を経験したAは、遠方に居住することで、自らを九州という比較的広域的な方言区画意識を獲得した。対照的に、生育地に定住し続けるBは、遠方での居住を経験しないまま、近隣地域との微細な違いにこだわり続けることで、極めて限定的な地域にアイデンティティを見出している。

このように、言語を通じた自他の境界線の引き方もまた、個人の歩んできた固有のライフストーリーの脈で規定されていることが分かる。

6. まとめ

本研究では、方言話者AおよびBへの半構造化インタビューデータをSCAT (Steps for Coding and

Argumentation on Text) を用いて質的に分析し、個人の人生の過程における方言意識・使用意識の形成および変容プロセスについて追究した。分析の結果、個人の人生の軌跡と居住地の移動に伴うことばの適応の連動性に関して、①「荒い」という印象の多面性、②生活環境の変化と方言使用の戦略性、③方言テリトリー意識の形成要因、という3つのグループに分類された知見を得られた。なお、表3に3つのグループの分類による理論記述を示した。以下では、これら3つのグループから得られた具体的な知見について詳述する。

6.1 方言イメージ「荒い」を形成する質的相違

方言話者 A、B とともに自らの生育地方言に対して「荒い」というネガティブな主観的評価を抱えていることが示された。しかし、そのイメージが形成された人生の歩み（プロセス）を詳細に比較すると、両者が抱く「荒い」という言葉の内実は大きく異なっていることが明らかとなった。

A における「荒い」は、成人後の東京への移動を経て、初めて標準語を生で体験したことによって事後的に構築されたものである。その対比軸は「スマートな共通語」対「スマートではない生育地方言」という二項対立にあり、ここでの「荒さ」は「洗練されていないこと」を意味している。重要なのは、A がこの「荒さ」に対して単に拒絶感を抱いているだけでなく、「懐かしさ」や「自身のアイデンティティ」をも見出ししており、肯定的に受容している点である。

一方、生育地に定住し続けた B における「荒い」は、幼少期に佐賀出身の母親から「佐世保弁は荒く、上品・丁寧ではない」と聞かされた初期の家庭環境に端を発する。さらに成人後、関東の親戚の「柔らかい」言葉遣いとの比較や、東京の人間から「喧嘩しているのかと思った」と評された経験によってその認知が強化されている。B の対比軸は「丁寧・上品・柔らかい言葉」対「不丁寧・非上品・攻撃的な生育地方言」という、対人的なプラグマティックな評価にあり、B にとっての「荒さ」は A とは異なり否定的なものとしてだけ捉えられている。

このことは、「荒い」という言葉一つで語られてあっても、個人のたどってきた人生の軌跡、つまり移

動による標準語とのマクロな対比か、あるいは定住環境における周囲とのミクロな差異化や他者による評価によって、その言葉が指し示す感情的評価が異なって形成されることを示している。

6.2 方言使用の戦略性

居住地の移動経験の有無は、方言を客観視し場面に応じた戦略的資源として活用することに影響を与えることが明らかとなった。

大学進学や就職による居住地の移動を経験した A は異なる方言との接触を通じて、自らの方言が周囲とは異なることを認知している。この認知から、新しい環境下での人間関係構築や、ビジネスにおける顧客との信頼関係を維持するために、A は方言と共通語を「自己とコミュニティの関係を調整するためのツール」として定義し、「意図的なコードスイッチング」という、地域社会に適応するための戦略を獲得した。

これに対し、B は生育地に定住した状態で異なことばと接触してきた。B にとっての他方言や共通語は、「佐賀弁は柔らかい」や「関東の言葉は上品」などのように評価や比較の対象にはなっても、自らの話し方を変えたり、調整したりする対象にはなかった。自らの方言テリトリーである生育地方言を常に使い続けられる環境に居るため、実生活において言葉を戦略的にスイッチする必要性が生じず、結果として方言使用は自然な表出であり続けたと考える。

6.3 方言テリトリーの意識と伸縮

方言話者が認識する方言テリトリーの意識の広がり、は、固定的な地理的境界に依存するものではなく、話者自身の物理的な移動に応じて、方言テリトリーの範囲が伸縮することが示された。

近畿地方や首都圏への居住地の移動経験を経た A は、非九州圏という他者の渦中に身を置くことで、外部からの眼差しを内面化することにより、A にとっての方言テリトリーは共通語圏や近畿方言圏と対峙するための「九州」へと再構築された。これは、生育地地域外への空間移動というライフイベントが、A が持つ方言テリトリーの解像度を粗くし、より巨

大な集団アイデンティティへの形成プロセスを示している。

これに対して、居住地移動の経験を持たない B における方言テリトリーは、A のような「九州と首都圏」といった対比は機能せず、その意識は日々の生活の地理的空間だけに向けられている。結果として、生活の地続きである佐世保市内の極めて微細なエリア（相浦・早岐・北松など）のわずかな語彙やアクセントの差異が、自分の方言テリトリーの内外を区別するための決定的な指標として機能することになる。これは、生育地での定住が、自身が持つ方言意識により微細な差異化を促し、母方言への愛着やこだわりをさらに強めていくプロセスを示している。

このように、個人が持つ方言テリトリーの設定は、客観的な地図の上に最初から描かれているものではない。それは、「自らがどこを歩み、誰と出会ってきたか」という個々人の移動軌跡によって、方言テリトリーの境界線は外側へと引き伸ばされたり、内側へと縮んだりするのである。

7. 課題と今後の展望

今後の研究に向けた課題と展望は次の通りである。まず課題として、多様な人生の軌跡をたどる調査・分析を行うために調査対象を拡大する必要がある。ジェンダーや世代、異なる地域の比較を可能にするためにサンプル数を増やすことが求められる。さらに、「一定期間の移動を経て再び生育地に U ターンした話者」や「多段階的な複数地域への移動を経験した話者」など、より複雑な移動経歴を持つ話者を対象とすることで、地理的移動と方言意識の変容に関する多様な動的モデルの構築が可能になると考える。

今後の展望として挙げられるのは、デジタルメディアや SNS の普及がもたらす新たな方言意識の形成と変容プロセスの解明である。現代社会においては、物理的な居住地の移動を経験せずとも、日常的に SNS や動画共有サイトを通じて他地域の方言や、ヴァーチャル方言や方言コスプレといったメディア上で生産される方言と接触する機会が増加している。このような非物理的な空間における他言語接触が個人の言語意識や自己の方言態度にどのような変容

を促すのかを探究することで、新たな方言意識の形成と変容のプロセスを探ることができるだろう。

注

1. 調査が行われた 14 都市は次のとおりである。札幌・弘前・仙台・東京・千葉・金沢・松本・大垣・京都・広島・高知・福岡・鹿児島・那覇。
2. インタビュー中に協力者が「九州弁」のように「～弁」という表現を使っているが、本研究においては「～弁」と「～方言」を同じ意味として解釈している。
3. インタビュー中に協力者及び聞き手が「標準語」という表現を使っているが、本研究においては「標準語」と「共通語」を同じ意味として解釈している。

引用文献

- 秋山智美 (2019) 「茨城方言に関する意識調査：市町村役場職員を対象に」『流通経済大学社会学部論叢』30-1, 55-78
- 井上史雄 (2000) 『日本語の値段』大修館書店
- 井上史雄・大橋敦夫・田中宣廣・日高貢一郎・山下曉美 (2013) 『魅せる方言 地域語の底力』三省堂
- 大谷尚 (2008) 「4 ステップコーディングによる質的データ分析手法—着しやすく小規模データにも適用可能な 理論化手続き—」『名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要』54-2, 27-44
- 大橋純一 (2023) 「方言使用とその意識に関する世代的な動態—秋田方言 3 世代調査—」『秋田大学教育文化学部研究紀要人文科学・社会科学』78, 37-45
- 言語編集部 (1995) 『変容する日本の方言：全国 14 地点、2800 名の言語意識調査』大修館書店
- 近藤沙耶 (2011) 「若年層の方言使用と方言意識」『東京女子大学言語文化研究』19, 33-49
- 佐藤孝一 (2022) 「コロナ禍における方言メッセージの特徴—二つの震災後の方言メッセージとの比較を通して—」『社会言語科学』25, 142-149
- 下地美紀 (2019) 「沖縄本島中南部の若者におけるウチナーヤマトグチ使用—方言に対する意識から沖縄方言の現状を探る」『理論地理学ノート』21, 43-54

- 陣内正敬 (2007) 「若者世代の方言使用」『シリーズ方言学 3』 方言の機能 第 2 章, 岩波書店, 27-65
- 高木千恵 (2006) 「関西における幼児期・児童期の方言習得」『日本のフィールド言語学』 真田信治監修, 桂書房, 300-314
- 竹村亜希子 (2010) 『方言習得における親の母方言の影響』 [博士論文, 神戸大学] <https://da.lib.kobe-u.ac.jp/da/kernel/D1005080/>
- 田中ゆかり (2017) 「全国 2 万人 web アンケート調査に基づく方言・共通語意識の最新動向」『語文』 158, 344-310
- 宮崎幸江 (2014) 「多文化の子どもの家庭における言語使用と言語意識」『聖カタリナ大学・聖カタリナ大学短期大学部研究紀要』 34, 117-135
- De Houwer, A. (1999). Environmental factors in early bilingual development: The role of parental belief systems. *Bilingualism and Migration*, Berlin, Germany: Mouton de Gruyter, 75-95.
- Wirtz, Mason A. & Pickl, Simon. (2025). Major life events as drivers of perceived linguistic change across adulthood. *Language Variation and Change* 37(1). 1-24

(Received: August 18, 2026)

(Issued in internet Edition: September 1, 2026)